研修旅行記

佐伯史談会 西北九州を歩く

今年度最大の収穫（十一月五日・六日・七日）

天草五橋――この名はもう古くなっている。しかし第一日、五橋を次々とバスで渡り、展望のよい会津での昼食の楽しかったこと。天気晴朗、絵に書いたように明るい天草の海であった。

頼山陽の〝雲か山か呉か越か――〟の、漢詩とは全くちがった、海と空の青、点在する島々、行き交う船の姿、さわやかな秋風、陽の光につつまれたみんなの明るい表情。あっちでもこっちでも写真をとっている。

やがて、島原に渡るフェリーボートに乗った。

天気はよし、海はおだやか。島原の山々が親しげに左手にながめられた。

島原では、島原城となの一角にある西望記念館だけの見学にとどめた。しかし今度の旅の研修目標の一つ、江戸時代のキリシタン史料に、私どもはまず島原城内に接することが出来た。キリシタン墓や武家屋敷跡などは、心ひかれながらもこの次の機会ということにしてバスに乗り、雲仙を越えて小浜に下り、灯のともるころ長崎の宿についた。

宿は展望のすばらしい山の上のホテル、眼下にひろがる、何百何千と街の灯のかがやく夜景、今も瞼の中にそのまま美しく残っている。

第二日、今日も上天気。　大浦天主堂の前からグラバー邸付近を歩いて、歴史の謎・造船の町長崎を、心ゆくまで展望する。そしてまたバスで埋もうの市街地を通り抜け、平和公園へゆく。昨日島原で予習した、北村西望作の平和祈念像を仰ぎ見る。再び原爆の悲劇をくりかえすことなかれと、つくづく祈念した。

私はすでに何度か来ているのに、今度はじめて〝平和の泉〟を知った。私も人々にならって、その碑に水をかけたが涙があふれるのを止め得なかった。

長崎を後にしたバスは、おだやかに光っている大村湾の西岸を走り、西海大橋のほとりで昼食をとり、佐世保を経て、平戸に向った。

この春開通したという平戸大橋を渡り、平戸城を右手に見つつ市街に入り、松浦史料館に入った。松浦水軍・オランダ貿易・ジャガタラ文・三浦按針・かくれキリシタンなど、中世から近世にかけての、松浦・平戸の歴史資料は、ここ旧藩主私邸（というても城郭造り）と共に、私共に次々と物語を話しかけてくる。

バスは、平戸を後に捷物の街伊万里・唐津へと入り、唐津城で唐津焼の陳列を見た後、虹の松原を通り抜けて県境を越して、風光明るい海浜の宿舎についた。これは意外で、密は唐津市内か、虹の松原の浜玉町ぐらいに考えていたが、案に相違してバスはこの松原を往復したことになる。

さすがに虹の松原、見事な姿の磯馴松が長々とつづく。すぐ近くに仰がれる鏡山、大石ガイド嬢は、松浦佐用姫が船出する夫君に別れを惜しむあまり、領巾を振ってついに石になった物語などしてくれて、いささか疲れていた私どもを楽しませてくれる。

小野運転手さんの確実・安全なハンドルさばき、それに添乗の米沢氏の行き届いたお世話　これらのお陰で旅の二日目も実に楽しかった。

第三日、この日は一度日程から外していた肥前名護屋城見学を、昼食佐賀という関係から、皆さんにはかってキロ程はかなりあったが、出かけることにした。

この名護屋城の見学については、幸い上杉会員が名文章と寄せてくれたので、全文をかかげよう。

名護屋城跡と吉良のおばあちゃん　（上杉清喜）

普通、一般の観光客では、この名護屋城を訪れる人は少ない―というバスガイドさんの説明を聞きながら、私たちは折から降り出した雨を気にしているうち、やがて到着した。目的の城跡である。

なる程、ここには目を見はる天守閣もなければ、例の商魂たくましい連中も見当らない。ガイドさんの説明もさればこそとうなずける。

みかん畑が道端まで開けて、苔むした石垣の隙間には雑草が生い茂っている。要所要所に掲げられた説明文を読みながら、頂上にたどりつく。本丸である。

徳川家康・福島正則・前田利家・小西行長・加藤清正・島津義弘等々、名だたる武将どもが、この名護屋城を中心に、周辺二〇キロに亘って陣所を張っていたという。

出征軍二〇万五千、ここ名護屋在陣軍一〇万二千とか、遠い遠い日の、つわものどものひしめき合っていた様が幽かに浮かんでくる。

さらに眼を遠く玄海の彼方に投ずれば、威風堂々、船足も軽く出陣したであろう軍船の姿を、私は勝手に想像しては

夏草や　つはものどもが　夢の跡　　芭蕉

の名句が、ひとしお胸を打つ。

そぼ降る雨は、古城の名残りをいや増して、しばし去り難いものがあった。

雨はいよいよはげしく、本丸目指して三々五々歩き運ぶ。先頭をきっているのは誰あろう、言わずと知れた吉良のおばあちゃんである。着物の裾をまくり上げ、傘のしずくも何のその、ついに跣になって一目散にかけ上っている。並の観光客であるならば、おそらくあの大雨の中、車の中に閉じこもっていたであろうに――。二本の脚で常に求め、常に学ばんと、猪進一途のおばあちゃんの真摯な態度には、本当に頭が下がった。

太閤が　睨みし海のかすみかな　　月斗

玄海はるか遠く睥睨して、どっしりと坐っている彫りの深い碑と共に、私の最も印象に残った今回の旅であった。

（注）土砂降りの雨は間もなくあがって、本丸跡の句碑などゆっくり写真に収めることができた。

佐賀で昼食をすませたが、このあたりの平野の広さ、国道の長い長い一直線、沿道水田の刈取跡始末の様子や家並みやとくに農家のすがた、物珍らしいものが多い。

バスは南関から東にはいり、菊池神社に立寄った後菊池渓谷へとわけ入った。紅葉で名高いこの渓谷には、秋はまだ深くなく、杉の造林が進んでいて、期待したほどでなかった。しかし次がよかった。

菊池渓谷を登りつくしたところは、すでに阿蘇外輪山の一角につながる高原である。

右手は阿蘇火口原で、その彼方に高岳その外の阿蘇五岳がはるかに連なり、左手は九重連山であるが、それとて瀬ノ本・牧ノ戸峠がどのあたりか、広々とうねう収と高原つづきで、定かに認めることが出来かねた。

バスは、高原の道を走りつづけて、外輪山の一角大観峰に向う。この大景観に魂をうばわれた一回は、疲れもなにも忘れてしまって、ほとんど全員、生まれて以来最

高のよろこびとして、この高原に降り立った。

ここで少憩、記念写真をとった後バスに乗り、一旦町蘇盆地まで下り、それから竹田を経由しての帰路についた。そして午後八時少し前佐伯に帰り着いた。

参加人員五十一名、快晴で暖かい三日間、見学地はどこもすばらしく、まことに恵まれたよい旅行であった。

記録

佐伯惟治公四百五十年祭
尾高知廟参拝の記

（羽柴 記）

大永七年（一五二七年）十一月二十五日、悲劇の人拝年礼城主惟治公が、尾高知の峯で憤死なさって、ちょうど四百五十年に当る。そこでその終焉の地尾高知廟で、墓前祭を催すこととなった。

午前八時、佐伯駅前をスタートした大型バスは、次々と参加会員を拾い、番匠で臼杵からお出での近藤氏夫妻さ加えて満車、国道十号線を南下した。会員がまず感激したことは、はるばる土佐の高知から、佐伯氏の末裔である細木渓龍氏が、今朝のフェリー便で加わられたことである。

萩葉から三川内（宮崎県東臼杵郡北浦町三川内）に向ったバスは、まず梅木の光久寺に参拝した。曹洞宗のお寺で、ここに惟治公の位牌がまつられ、古い過去帳があった。前もってお願い申してあったので、松垣住職はまず丁重に、惟治公の古びた位牌に、ねんごろな読経さあげられた。

参加していた龍護寺の森本住職も法衣に改めて列座、直川村黒沢の願王庵の庵主と共に読経、本堂一ぱいの会員それに地元梅木の区長さん以下多数拝礼、まことににぎやかなものであった。

終って一同は打連れて、すぐ近くの鶏野尾神社に参拝する。ここ梅木部落の鎮守で、勿論佐伯惟治公が祭神である。惟治公がお召しになっていた直垂があるそうだが、今日は拝見するひまがなかった。

一行を、梅木の方々を乗せたバスは、古江峠までのぼり、新しく出来ている林道を一キロ半ほど歩いて、橋ケ谷に達してそれから谷間の小径を少したどって、尾高知廟に達した。

地図には尾高知神社と出ており、りっぱな鳥居まであるが、ここは光久寺持ちの惟治公の廟所であり、お霊屋の向って右に鎮魂碑、左に墓碑が、風雨にさらされていで、悲劇の跡をとどめている。

佐伯から携えて来たお華（しきみ二対）を供え、燈明をつけて読経が長々とつづき、そして墓前読経が行われ、境内にあふれた七十名ばかりの参拝者も、次々と拝礼した。

ここで思いがけずも、梅木の方々のみでなく、地元歌糸・イヤザメの方々十数名により、酒・焼酎などのおもてなしに接した。四百五十年という歳月の流れの中で、よその城主、攻めほろぼされた惟治公をまつりつづけて来て、今ここに大挙して参拝の佐伯の私共を、歓待して下さるお気持ちは、本当にありがたい限りであった。混雑の中であったとはいえ、区長さん外皆さんのお名前もとくと承らず、相すまないことであった。

帰りは元来た道を引きかえしたものが大半で、あとは尾根すぢの赤鳥居に出て、吉江・島野浦島など北浦の海をながめながら、半ばやぶでふさがった小道さ古江峠に下った。

おみやげまでいただいて、地元の方々と別れてバスに乗った私どもは、再び三川内に出て九市尾に出る予定を変更（岐尾峠からの下り大型バスでは無理というので）、国道十号線に